

☆☆☆ Library Eye 2020 ☆☆☆

第7号 2020.10.1(木)

発行元 明星中学校・高等学校 図書館



【READING FOR FUN!】～高1英語科の先生方との新たな試み～

図書館には、約18,000冊の洋書が所蔵されています。日本語でもおなじみの絵本からハリーポッターのような読み応えのあるものまで、様々な洋書を取り揃えています。中1・中2は洋書を使った多読多聴の授業が図書館で行われています。この2学年は授業内で洋書にふれる機会がありますが、中3からは洋書を手に取ってもらうチャンスが減ってしまいます。そこで、高1の英語科の先生方からの提案で、生徒の目に触れやすく手に取りやすいよう、5階の高1教室前の廊下に、洋書の展示コーナーを設置しました。



ノンフィクションを中心に、鮮やかな写真でおなじみの『National Geographic』シリーズや『Greaded readers』（外国語として英語を学ぶ人々が対象の文法や語彙を制限したレベル別の洋書）を展示しています。とても見やすいディスプレイで、00付の洋書も多数あり、00プレーヤーも一緒に設置しています。貸出ノートに記入すれば、借りることもできます。気軽に興味がある本を手にとって、洋書に親しんでもらえたらと思います。



【チャンプ本は、星新一の『ボッコちゃん』】

先月、中学3年生のビブリオ大会を見学させていただきました。ビブリオ大会とは、ずばり”知的書評合戦”。ビブリオバトル普及委員会の公式ルールによると、「①発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる ②順番に一人5分間で本を紹介する ③それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う ④全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする」とあります。

当日は、各クラスの代表者（バトラー）が、自分のお気に入りの本を懸命にアピールし、他の生徒さんたちは熱心に聞いていました。そして、i-padによる投票が行われ、1位のチャンプ本には『ボッコちゃん』（新潮社）が選ばれました。長いお話が苦手な人にも楽しめるショートショート50編からなる、SF作家・星新一の代表作です。実に60年以上前の作品が、10代に支持されました。

残念ながらチャンプ本にはなりませんでした。あの世とこの世の境界にあるような海月館を舞台にしたミステリー『海月館水葬夜話』（東堂燦/集英社）、映画を見ているように綺麗だと絶賛された『ハリー・ポッターと賢者の石：イラスト版』（J.K. ローリング：ジム・ケイ/静山社）、桜のように儚く美しい恋の物語『桜のような僕の恋人』（宇山佳佑/集英社）が紹介されました。これらの本は、すべて図書館にありますので、是非、読んでみてください。

【人生のルビコン川?】

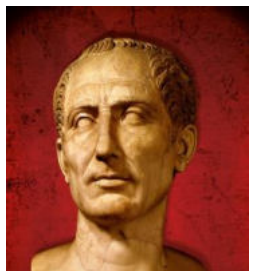
『町中華で飲ろうぜ!』というTV番組があります。出演者が町の中華屋さんを探訪し、料理を肴に一杯やるという内容です。その回は、通称「町中華の黒帯」という芸人が極貧の下積み時代を送った門前仲町をプブプと歩きながら当時の苦労話を語っていたのですが、大横川に架かる巴橋にさしかかったとき、黒帯は大横川を指差し、「人生のルビコン川」と言ってスタッフの笑いを誘いました。

ルビコン川とは、紀元前49年、ユリウス・カエサルが、宿敵ポンペイウスを伐つために渡ったガリアとイタリアを流れる境界線の川のことです。渡るのは簡単ですが、軍隊を率いてイタリア本土に入れば、ローマの法律によって、反逆者として軍隊と共に処刑されます。

しかし、意を決したカエサルは「賽は投げられた!」と叫ぶと、ついに軍隊を率いてルビコン川を渡ったのでした。ここから「覚悟を決めて重大な決断をする」ことを「ルビコン川を渡る」と言うようになったのです。

ユーモアに富んだ会話は、人生を、より楽しいものにしてくれます。

この芸人はタケシ軍団の一員で、とにかく本を読みなさい、という師匠の教えなのでしょうか、読書家としてもよく知られています。昔から「芸は身を助ける」と言いますが、幅広いジャンルの読書が「言語に味」をもたらしてくれました。



【図書館雑感】

毎年、考査1週間前くらいになると、司書室は騒音に悩まされることになります。壁1枚隔ててすぐ隣が生徒用の男子トイレになっているのですが、その個室のドアや壁をドンドンと叩いたり蹴ったりしているようで、ひどいときには司書室が振動することもあります。



さすがにそういう場合は、わざわざトイレまで行って注意するのですが、不思議なことに考査が終わると、ピタッと音もやみます。ストレスがなくなったからでしょう。

ところが、今年は、とても静かです。お行儀が良いということもあるのですが、長い自粛生活によってまだいつも通りの学校生活に「戻れない」生徒たちがいるのではないかと心配にもなります。

約4か月ものあいだ、ずっと自宅で過ごす機会が多く、運動不足によって体力や運動機能が低下したりしている児童・生徒が全国的に増加していると聞きますが、「身体」の状態は「心」に直結します。

全員そろっての授業がスタートしたばかり、という影響もあるとは思いますが、この時期にしてはあまりにも静かな教室を見ると、まだ気持ちの面で学校に戻れていない生徒や、新しいクラスに溶けこめない生徒もいるのかもしれませんが。

今年は例年以上に、私たち大人の「見守り」が、これから先も必要となるでしょう。

【「!」→「。」?】

池上彰氏が『PRESIDENT2020.9.4』の中で、ベトナムを訪れたときの体験を語っています。ホーチミンの街へ行くと、店番をしている若者たちがみんな本を読んでいた。この国は発展すると思ったが、予想通りベトナムは経済発展を続けている。ところが、次に訪れたラオスでは本屋すら見あたらなかった。それは政治に対する反発を恐れる愚民化政策の証しで、その国が発展するかどうかは、次の時代を担う若者たちが一生懸命に読書をしているかどうかで測れる、というのです。

好奇心はご褒美(報酬)以上に子どもたちの原動力となってはなっていますが、子どもたちは大人になるにつれて「!」から「。」へと変化していきます。子どもの頃には何事に対してもすぐに感動するのですが、これでもか、これでもかと知識を詰めこまれているうちに、心にカサバタでもできたように無感動になっていくのです。そうなる前に、読むことを純粋に楽しむ読書習慣を育てておきたいものです。

ブエノスアイレス 世界でいちばん美しい本屋

